光と闇、不幸と幸福

紫苑-SHION-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
光と闇、不幸と幸福

【Ｎコード】
Ｎ２３３６ＢＡ

【作者名】
紫苑－ＳＨＩＯＮ－

【あらすじ】
異世界から来た
不思議な少女と出会い、
不思議な体験をする
不思議な物語。

不幸に包まれていた主人公は
最後には幸福に

包まれるのでしょうか？

一、不思議な少女（前書き）

誤字、脱字等あれば
お教えください

一、不思議な少女

「え・・なんだって・・・・？」

1人の男が低い声で誰かと電話で話していた。

その男の名前は”神柳（しんやなぎ）蓮（れん）”。この物語の主人公である。

酷く驚いた表情をして、蓮は電話の相手に問いかけた

蓮「悪い…もう一度言ってくれ…。よく聞こえなかった」

友達「だから…お前の親父。今日仕事に行く途中にトラックに巻き込まれて亡くなったらしいよ」

ガシャーン

蓮は電話を落としてそのままその場に座り込んだ。それもそのはず…蓮は2日前に母を病気で亡くしたばかりで精神が安定していなかった。

だが、今日…そんな蓮にまた不幸な話が舞い降りてきたのだ。蓮はそんな現実を受け止めることが出来ずにただただ座り込んでいただけだった。涙も枯れ果てたようで、まるで抜け殻のようだ

蓮のことをザッと紹介すると、年齢は二十歳。身長は１８０弱のやや細身。髪はいまどきの髪型で、家族の手伝いも仕事も真面目にして、なかなかのいい男だと地元のおばちゃんは口を揃えて言う。

家族を失った蓮は、生活のために仕事を増やそうと、仕事を探しに外へ出た。外は快晴でとても気持ちのよい天気だった。太陽の光が優しく蓮を包み込んでくる

蓮「いい天気だな・・・」

蓮は静かにつぶやく。

？「ん・・・」

蓮「ん？」

とても小さい声だが、確かに蓮の耳に誰かの声が届いた。蓮は気になって声が聞こえた方向へ静かに歩き出した。

蓮「確かこの辺から声が聞こえた気がしなくもないのだが・・・のわっ！？」

蓮は漫画のように派手に大袈裟に飛び上がって驚いた。なぜこんなに驚いているのか・・・蓮の視線の先には、ボロボロに汚れている少女が息を切らして倒れていた。

銀髪の黒いゴスロリのような服を着ている、どこか不思議な少女だった。顔も服もドロドロに汚れていてよく表情は見切れなかったが、苦しんでいるのはすぐにわかった。

蓮「ど…どうしよう」

少女は意識がないようで、蓮が触れても話しかけても反応がなかった。とりあえず見過ごすことはできないので、蓮は少女をお姫様抱っこで抱えて家に連れて行った。

蓮の母が使っていたフカフカのベッドに少女を寝かせて、濡れタオルで汚れている顔を綺麗にふいてあげた。

さっきは顔がよくわからなかったが、なかなかの美人だ。顔のパーツが整っていて、まつげが長く、口唇もうすいピンクで肌も白く・・・蓮はつい見とれてしまい、唾をのむ

数分して、少女は静かに目を開けた。

蓮「お・・気がついたか？」

蓮は少女に優しく話しかけると少女は瞳だけを動かして蓮の顔をジッと見て小さく口を開いた。

？「・・・ここは？」

とても小さいが確実に、透き通った声で蓮にたずねた

蓮「ここは俺の家！あんた道に倒れていたんだぜ？だからこのままじゃダメだと思って家に連れてきたんだ。具合はどうだ？」

蓮は少女のおでこに置いていた濡れタオルを取り替えながら、少女の体調を心配した。少女はしばらく黙ってうなずいた。これは”もう体調は大丈夫”と言っているのだろうか？無口な少女なのか、あまり言葉を発しなかった。

しばらくして、蓮は気になっていたことを少女に聞いた。

蓮「なぁ・・一つ聞きたいんだけど・・・なんであんたあんなとこ

ろに倒れてたんだ?そんな変わった格好してさ」

蓮は少女の着ている、ゴスロリと悪魔の服を合成させたような変わった服装をみて言った。

少女は蓮を見ながら静かに言った。

?「私から見たらあなたの服装は下着に見えるのですがこの世界ではそのような服装が一般的なのでしょうか・・・?」

蓮はTシャツにスウェットというラフな格好をしていたが、決して下着姿ではない。この世界では!?この少女はこの世界の人間じゃないの!?一気に疑問が湧き出てくる。

蓮「え・・ごめん。あんたはどこから来たの?」

蓮は頭が混乱しながらも、少女に聞いた。少女はしばらく黙っていたが、ソッと一言だけつぶやいた。

?「・・・異世界」

蓮「ふ〜ん・・異世界か・・・って・・え!?いい…異世界!?」

じゃあこの少女は地球人じゃない。地球人じゃなかったらなんだ？宇宙人？そんなわけあるかっ！火星人か？異世人！？

頭が混乱してうずくまっている蓮を見ても、少女は冷静に続きを話した。

？「…私は一言で言うと旅人です。異世界にはたくさんの街があり、自然があり、魔物もたくさんの種類が存在します。その途中で光の扉に遭遇してしまい、この世界に来てしまったのです。そしてさまよって体力が尽きて倒れているところをあなたに救って頂きました」

少女は一気に蓮に説明をした。蓮はやっと少女の状況と正体を把握したが、なんとも信じられない話だった。異世界から俺らの住むこの世界に来る！？ってか異世界ってまじであるんだ。

蓮「光の扉って何？」

？「異世界とこの世界を行き来するための通路のようなものです。しかしいつどこに扉が現れるかわからないので…現れたら扉に吸い込まれてしまうんです。なので嫌でもこちらの世界に来てしまうことが時々あるのです」

嫌でもって・・・

蓮「異世界にはどうやって戻るんだよ？」

どんどん疑問が出てくる。

？「魔法で戻れます」

蓮「へぇ・・魔法でか。って…え！？魔法使えんの？」

？「はい。異世界では魔法を使えない人の方が少ないですよ。すぐに異世界に戻ろうとしましたがせっかくなのでこちらの世界を探索しようと思って体力が尽きてしまったわけです」

この少女・・・真面目なのかドジなのかわかんねぇな

二、異世界

蓮「・・・で。ちょっと休んだら異世界に帰んの？ってかあんた名前は？」

？「・・・ユリアです」

名前も可愛い！蓮は思わずにやついた。

蓮「なぁ！俺もその異世界ってやつに連れて行ってくれよ！」

ユリア「え・・？」

ユリアは驚きの表情を見せて蓮の顔を見た。

ユリア「異世界へ行けばいつこちらの世界に戻れるかわかりません。異世界には危険がいっぱい…命を落とすことだってあるんです。それでもいいんですか？」

ユリアは真剣な眼差しで語りかけた。蓮は一瞬戸惑ったが考えは変えなかった。

蓮「別に構わない。俺には家族もいないし友達もいない。異世界に行っても何も問題ないよ」

すこし切ない表情で蓮は静かな声で下を向いた。ユリアは黙って蓮を見つめていた

ユリア「・・・わかりました。本当に命の保障はありません。それだけご理解お願いします」

ユリアはそう言うと、小さな掌を蓮に差し出してきた。

蓮「え・・何？」

ユリア「私の手に触れていないと異世界へ共に行けませんよ」

蓮「あ・・えっ・・・わかった」

蓮は慌ててユリアの手に触れた。それを確認したユリアは上を向いて何やら呪文を唱えだした。

ユリア「光の生命よ。我が世界へお連れください。ホワイトループ

！」

ユリアが呪文唱えた瞬間、２人の体は白い光に包まれ、一瞬で目の前が真っ白になった

・・・・・・

蓮「う～ん・・・」

蓮は強く頭を打ったようで、頭を抑えて体を起こした。

蓮「いってぇ～・・ん？」

蓮は我を取り戻して辺りを見渡すと・・・草、草、草…大草原のど真ん中にいた。そしてすぐそばにユリアが倒れている

蓮「おい！？大丈夫か」

ユリア「う…う～ん・・・」

ユリアは目を開き、辺りを見回す。

ユリア「ここだわ。ここで光の扉と遭遇したんです」

周りは草しかなく、遠くを見ても木一本も見えなかった。

蓮「ここが異世界か・・。ユリアは旅の目的とかあんの？」

ユリア「無いですよ？たくさんの出会いを求めて私は旅をしているのです。魔法もたくさん習得したいですし。すべての魔物に遭遇して図鑑をつくるのが目標なんです。もう１００種類の魔物をこうして図鑑にしています」

そう言って、自慢げにたくさんの魔物のステータスなどを書いた図鑑を蓮に見せてきた。確かに色んな魔物の写真と共にたくさんの情報が書いてある。なんか気持ち悪い魔物もいる・・・。

こんな生物本当にいるのだろうか。まぁ現にこうして写真があるわけだからいるんだろうけど・・・

蓮「・・で。とりあえずどこ向かうの？」

ユリア「あなたが魔法を使えるようにある村へ行きます。この世界では魔法が使えなければ死にたいと言っていることと同じですから」

この子、意外にハッキリ言う子だな・・・。真顔でそんなハッキリ言われたら怖いじゃん。そんな顔も可愛いけど・・

そんなことを考えながらも、二人はゆっくり歩き出し、広い草原の中を進んでいった。

ユリア「・・そういえば。私だけ名前をお教えして、まだあなたの名前を聞いていませんでしたね」

蓮「あれ？そうだっけ？あ・・俺は蓮！神柳蓮だ」

ユリア「変わったお名前ですね・・・」

蓮「そう？」

ユリア「・・それより。村であなたの服も買わないといけませんね。その格好は私達から見たら下着姿なので・・・」

そんなこと言われたらすっごい恥ずかしくなるんだけど。早く村につかないかな

蓮「あれ？なぁなぁあの遠くに見える村っぽいやつ…あれか？」

ユリア「多分そうです」

多分かよ。

目的地が見えたため二人の足取りは速くなった。あっという間に村

へ着き、とりあえず蓮の服を探すことにした。

狭いがとても綺麗で活発な村だ。藁の家がたくさんあって蓮の住む世界のようにコンクリートが明らかに少ない。ってか無いに等しい。

まさか蓮もユリアが着ているようなゴスロリ系の服を着させられるのか・・・蓮はわずかに顔を青ざめていた。

だが、店を覗くと…割と普通の服が多かった。どこかの民族衣装のようだ。それにしてもユリアは何も話さないでスタスタと蓮の前を歩いているが・・もうちょいゆっくりでもいいじゃんよー…

するとユリアは突然立ち止まり、蓮はユリアにぶつかった

蓮「ぶ！いってぇ～…なんだよ急に立ち止まってさ」

ユリア「・・この服。安いし生地がいいしデザインもいい。どうですか？蓮。」

うわぁ～急に呼び捨てだから一瞬ドキッてしてしまったじゃないか・・・

蓮「ん？あ…あぁ、いいんじゃないか？俺、黒好きだし」

ユリアの差し出した服は、全身真っ黒で所々赤いラインが入った色

違いの虎のような服だった。だが決してデザインは悪くない。むしろ好みだ

ユリア「…じゃあこれで。すみません。これお願いします」

店員「あいよ！８００チルだよ」

”チル”とはこの世界のお金の単位らしい。

ユリア「ありがとうございます。あの・・長老は今どこにいるかご存知ですか？」

店員「ん？あぁ、女神の湖に水をくみにいっているよ」

ユリア「わかりました。ありがとうございます。蓮、女神の湖へ行きましょう」

蓮「え・・なんで？」

ユリア「長老は高度魔法をいくつも使えるエリートです。そのお方に魔法を学びに行くのです」

なんだなんだこの展開は！？ってか俺にも魔法使えんのかよ。今、不安しかないけど大丈夫？ユリア歩くの早いし、勝手に決めて進んじゃうし追いつかないよ。男が言うことじゃねぇけどさ・・

二、異世界（後書き）

最近オールの日が多くなってきた紫苑ですw
なかなか忙しくて小説を書く暇がありません…。

誤字、脱字等ありましたら
ご指摘ください

三、勉強三昧

蓮「なぁなぁ、女神の湖ってどこにあんの？」

ユリア「森の奥のさらに奥です。神聖な場所なので安全な魔物しか存在しません。下調べ済みです」

やっぱりユリアは真面目な子なのかな。でもさっきからあんま顔を見て話してくれないから地味に傷付くんですけど・・・まだ信頼されてないのかな

ユリアが歩くの早いからすぐに湖についた。広い湖で神秘的だ・・。水面がキラキラと絶え間なく光っている。その湖のすぐそばに人がいる。あれが長老か・・・？

ユリア「カゲロウ長老さま」

長老「…ん？あぁユリアか。またこの村に遊びに来たのか？」

長老・・思っていたより見た目は年齢より若々しい感じの人だった。優しい顔をしている

ユリア「まぁね。この人の服を買いに来たの」

長老「・・そなたは？」

蓮「あ・・俺は神柳蓮・・・です。」

ユリア「私の新しい旅仲間ですよ。違う世界からきたのでまだ魔法が使えないんです。良ければ長老・・・蓮に魔法をお教え頂けないでしょうか？」

長老「はは！なるほどねぇ、この世界にきた時点である程度の魔力は与えられているはずだ。わしが色々教えてやろう」

ユリア「ありがとうございます」

もう既に蓮には魔力が十分にあるという。蓮は自覚は無かったが魔力があると聞いて、気分が有頂天になった。

長老「わしの家にきなさい。まずは知識からじゃ」

そう言われると、二人は長老の家へ向かった。長老の家は蓮の世界でいう神社のような作りだった。長老は二人を家へあがらせ、数冊

の分厚い本を持ってきた。

長老「まずはこの本の内容を覚えることからじゃ。この世界で生き抜くためには覚えなければいけないことが山ほどあるのだよ」

うへ～・・これ全部覚えるとか正気かよ。全部で7冊。本の暑さは5～6センチってとこか。

勉強は嫌いじゃないけど全部覚えろとかむちゃな話だぜ？なんかややこしい呪文がいくつものってるし魔物の種類が全５０００種類以上とかふざけてるだろ・・・

長老「ほっほっほ！まぁ頑張りなさい。わしは居間にいるから覚えたらおいで」

なんだこの長老・・・。これだけの量ぐらいなら簡単だろうと言わんばかりに高らかに笑いやがって・・そう言うなら維持でも全部覚えてやる

蓮は言うに負けず嫌いであった。その性格が役にたち、次々と本の内容を暗記していった。

そして数時間後・・・

ようやく3冊の本を丸暗記して蓮は倒れ込んだ。

ユリア「大丈夫ですか？時間はたっぷりあるので今日のところは休みましょう」

ユリアは優しく、倒れた蓮の髪を触り、長老のいる居間へ行った。

さすがに限界を感じた蓮は休むことにした。もう時計は夜中の2時を過ぎていた。

この家に来たのが夕方ぐらいだから・・・8～9時間勉強したことになる。明日になったら半分は忘れてしまっているだろうからかなり勉強しないといけないな・・大丈夫か俺・・・。

長老「ふむ。数時間で3冊も覚えるとはなかなかやるのぉ～。布団を出してやるから今日は寝なさい。数がないからユリアと一緒に寝てもらうが構わんかの？」

ユリア「私は構いませんよ」

ちょ・・え!?ユリアと同じ布団で寝るとか大丈夫!?いや・・何かするとかじゃねぇけど、かなり緊張して逆に寝れなさそうなんだけど。ユリアは何も思ってないみたいでいたって冷静だった。

長老「・・でどうするんじゃ?蓮」

蓮「あ・・えっと・・・一緒で大丈夫…です」

蓮は少し顔を赤らめながら答えた。やましいことはないといえど、女の子と同じ布団で寝るのは初めてで蓮はどういう顔をしていいのかがわからず、ユリアの顔を見ていた。

二人はろうそくの火を消して布団に入る。すると・・ユリアは静かにこう言った。

ユリア「・・今日はお疲れさまです。また明日も一緒に頑張りましょうね」

そしてユリアは静かに眠りについた。蓮はその一言が素直に嬉しかった。

一緒に頑張ろうの一言は蓮をやる気にさせた。蓮もユリアの頭を撫でてゆっくり眠り始めた。

次の日・・・

蓮「う～ん・・・」

まだ日が昇る前に蓮は目覚めた。だが横にいるはずのユリアがいなかった。長老はまだ眠っている。ユリアはどこに行ったのだろう？蓮は気になって、静かに外へ出た。

すると、太陽が昇ってくる方向にユリアは立っていた。蓮は静かに近付いて声をかける

蓮「おはよう、ユリア」

ユリア「あ・・・おはようございます」

蓮「こんな早くにそんなところで何してんの？」

ユリア「・・亡くなったお母様のことを考えていたのです。私のたった一人の家族だったお母様は３年前に魔物に殺されました・・・。あのときのことはまだ忘れられません」

蓮「・・・そうなのか。俺も家族を失った。母さんは病気。親子はトラックに巻き込まれてさ・・。俺には不幸しか来なくて、幸福なんてやってこないと思ってた。でも、今はユリアがいるし不幸だとは思わないよ。一人じゃないんだから」

ユリア「一人じゃない・・？」

蓮「うん！ユリアにも俺がいる。一人じゃないんだよ」

ユリア「・・そうですね」

ゆっくり昇ってきた太陽に照らされ、ユリアが微笑んでいるのが僅かに見えた。

蓮「さぁ、今日で全部暗記してやる！」

ユリア「ふふ・・頑張ってください。応援しています」

二人は寄り添い、ゆっくりと顔を出す太陽をいつまでも見ていた・・・

三、勉強三昧（後書き）

更新率バラバラですみません。夜にしか書く時間がないので少し間があきそうです

読んでくれてる方ありがとうございます。

誤字、脱字等ございましたらご指摘ください

四、習得の厳しさ（前書き）

三、勉強三昧に漢字変換間違いがありました。
「本の暑さは5～6センチ…
ってところですが”暑さ”ではなく”厚さ”です。すみません

今日から学校なので更新率は微妙です。がんばります！

四、習得の厳しさ

蓮「よしっ頑張ろう！」

なんだか無性にやる気が起こった。ユリアと一緒に朝日を見られたからかなぁ？ユリアと一緒に旅するためにも頑張らないとな

うん…頑張りたいのだが、頑張れない…ってか集中できねぇぞ！ユリアがすっごい近くで丸い目して俺を見てくるから…。なんでそんなに見るんだ。

ユリアは真面目だからちゃんと魔法の知識を頭に入れているか監視しているだけなんだろうけど…俺にとってはそれが集中できない理由になるのだが……

…っと考えてる暇なんかないからやるしかないんだな。昨日は3冊覚えたけど、予想した通り半分も記憶に残っていない…。どうすりゃいいってんだよ。これじゃあキリがないや

蓮「なぁ…ユリア。これって覚えるコツとかある？」

ユリア「……」

蓮「あれ？」

話しかけても返事がないと思ってたら…寝てんのかい。まったく…可愛い顔して寝やがって…。そういえばユリアはずっと俺の勉強に付き合ってくれていたんだっけ……。うん、ユリアに負担かけないためにも俺が頑張らないとな

ユリアを起こさずに俺はその後も勉強を続けた。

数時間後・・・

蓮「はぁ～…つかれた」

俺は1回休憩しようと寝転んだ。すると誰かが歩いてきた

長老「調子はいかがかな？」

蓮「最悪」

長老「ほっほっ、来なさい。今日は特別に１つだけ魔法を習得させてやる」

蓮「まじっすか！？」

ついに魔法を教えてもらえる！どんな魔法なのかなー、何かの漫画であったみたいにメラゾーマとかベホイミとか唱えればいいのかなぁ。そういえばまだ魔物に関しての勉強しかしてないから魔法のことは、何もわからないや…。

とか考えながらもなんか無駄に広い敷地に着いたぞ…。誰もいないし風の音しかしない…決闘とか行われていそうなこの雰囲気…不気味だ。

長老「ゴホン。基本的な魔法からじゃ。まず手から火を出せるようになることから始まる。」

蓮「手から火出すって熱くないの？」

長老「自分の出す炎は自分にはきかないのじゃよ。わしの炎を君が触ったら、まだ防御力が低すぎるから間違いなく焼け死んでしまうがね。はっはっは」

すっごい高らかに笑ってるよこの人…。ってか俺にも火なんか出せるのかな。

蓮「へぇーじゃあ早速教えてくれよ！呪文はどんなの！？」

長老「火の魂よ、我が手に集いたまえ…イージーファイアー！！…と唱えるのじゃ。ちなみにイージーファイアーは最も威力が弱いとされる炎魔法じゃよ。その上がハードファイアー、さらに上がエキサイティンファイアー、もっと上が、難易度はグンと高くなるがボンバーエキスプレスという魔法じゃ。」

蓮「すげー、それだけでも４種類あるんだなぁ…。イージーファイ

アーが出来ればいつかボンバーエキスプレスも出来るようになる！？」

長老「魔力と精霊や魂などの動きをコントロール出来ればお前さんにも出来るはずじゃ」

うっしゃ！それを聞いたらやる気が出てきた。とりあえずイージーファイアーをちょいちょいと使いこなしてやる！

蓮「火の魂よ、我が手に集え、イージーファイアー！！」

……あれ？
炎どころか火の粉すら出ないんだけど？？呪文は間違ってないのになんで出ないんだ！

長老「……いや、わしを見るでない。お前はただ呪文を唱えているだけじゃ、本気で魂を手に呼び込む気持ちで呪文を唱えなければ火の魂は集まってはくれぬ。」

蓮「本気でって言ったって…。」

火の魂ってホントにあるのかよってどうしても心の中にあって消えないんだよー！！

蓮「火の魂よ、我が手に集え、イージーファイアー！！」

俺はその後も、同じ言葉を繰り返し叫んだ…何度も何度も…。声が枯れるまで、同じ呪文を唱えて火の魂を呼び続ける。しかし、気がつけばすっかり日は落ちていて、月や星のあかりが村を綺麗に照らしていた。

後ろを振り向けばユリアがいた。ずっと俺を見守っていたのか…？ユリアがいる前で何度も初級魔法を失敗するなんて情けない…。

長老「ふむ…今日はこの辺にして休むとしようか。我が家に戻るぞ」

長老はスッと迷いなく家に向かっていった。俺はあまりの悔しさにその場を動くことが出来なかった。丸一日やって成果は１つも無し…。誰だ、イージーファイアーをちょいちょいと使いこなしてやる

って言ったのは……俺だけど。

ユリア「…蓮。今日は戻って休みましょう？また明日もあります。挫けずに…諦めずに頑張りましょう」

ユリアは少し微笑みながら優しく俺の袖を握りしめた。

蓮「…うん」

明日こそは明日こそはで…俺はいつになったら成長するのだろう。魔法を習得できるのだろう。いつになったら…魔法を使いこなせる自分が当たり前になる明日が来るのだろう。

なんで俺はこの世界に来たんだっけ…？うん…親も死んで何もない毎日にうんざりして、刺激を求めて異世界に来たんだ…。その刺激をいつ味わえるのかを考えると頭に激痛が走る。

1日でも早く、威力の弱い魔法1つでも習得したい。魔力があるから…あとは火の魂を信じれば大丈夫。今日は疲れたから休もう…。

俺とユリアは家に戻り、長老の用意していた晩御飯を静かに一気にたいらげて布団に潜った。

ユリアは布団に入ってしばらくして、俺に話しかけてきた

ユリア「蓮…。今日は駄目でしたけど…いつか必ず魔法は習得できますよ。私も初めは初級魔法も使いこなせませんでしたが、諦めずに続けていたら今のように魔法を使用できるようになったのです。だから蓮も諦めてはいけませんよ？」

なぜかユリアが言うと妙に説得力があって俺の胸に響いた

蓮「うん…ありがとう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2336ba/

光と闇、不幸と幸福

2012年1月10日08時47分発行